

Run を伴う場所句倒置構文の使用の偏りとその動機づけ

三野 貴志

1. はじめに

本発表は、大規模コーパスを用いた調査を通して、run を伴う場所句倒置構文の典型的な使用状況を突き止め、構文・動詞の意味と使用文脈との関わりを明らかにすることを目指す。具体的には、run を伴う場所句倒置構文は人や動物等の物理的移動ではなく、(1) のような道や川等の地形などの仮想移動を表す例が大多数を占める。

(1) Down the hill from the house ran the train tracks. (COCA)

新情報を導入する等の機能を持つ場所句倒置構文はモノの位置関係を描写することに特化した構文であり、地図・地形などを描写する文脈で用いられやすい。run もこのような文脈で使用された結果、道や川等の地形などの仮想移動を表す用例が大多数を占めるようになる。つまり、構文の機能から導かれる典型的な使用文脈に合わせる形で、構文・動詞の意味が調整されており、使用文脈と構文・動詞の意味には強い結びつきがあるといえる。

2. 先行研究

2節では、場所句倒置構文の先行研究と動詞 run の先行研究を概観する。

場所句倒置構文の機能に関しては、これまで様々な研究の蓄積があり、一つに決めるのは非常に困難だが、有名な研究として大きく4つのタイプの研究がある。これらはそれぞれが大きく対立しているわけではなく、互いに分析の角度・焦点・用語が異なる程度の差だとも言える。

第1に、場所句倒置構文は旧情報を導入した上で、新情報を提示する構文だと言われている (Birner and Ward 1998)。第2に、場所句倒置構文は、Ground を導入した上で、Figure を導入する構文である (Chen 2003)。具体的に言うと、まず聞き手の注意を Ground に向けさせる。そうすることで、聞き手は Ground の領域にある、談話の場を通して既に知識内にある Landmark を見つける。その Landmark が参照点として働き、聞き手は Figure を探索する。第3に、経験、知覚する順番に描写する構文でもある (Dorgeloh 1997, Prado-Alonso 2008)。具体的には、話し手が場所などに目を向けた後、その場所を基準に他の物体に目を向ける流れを、そのまま iconic に反映した構文である。第4に、話し手の視点を反映した主観的な構文だとも言われている (Drubig 1988, Dorgeloh 1997, Webelhuth 2011)。話者が前置される前置詞句に視点を置き、そこから直接的にその事態を観察する構文である。この4つの機能が場所句倒置構文の具体的な振る舞いに影響すると想定し、この関わりについて本研究では明らかにする。

次に run に関する先行研究 (Gries 2006, Glynn 2014) を概観する。Gries (2006) などは、run の多様な意味の中で、(2) のような「高速移動義」が最も典型的であると指摘している。

(2) Simons had run down to the villa to get help. (206例) (典型例：多数派) (Gries 2006: 63)

一方、本研究が着目するのは(3) のような仮想移動の用例である。仮想移動では、実際に物体が動いているわけではない。動いているのは話者の視線であり、長い物体等の上を視線を走らせることで、その物体が走っているかのように描かれる。Gries の調査では、仮想移動義は高速移動義の4分の1程度の用例しか見つからなかった。

(3) Street car tracks run down the center of Pennsylvania. (55例) (Gries 2006: 67)

本研究では、run の意味を3タイプに分けて分析する。run は非常に多義的な動詞であるが、場所句倒置構文の分析においては、この大雑把な3タイプで十分事足りうる。1つ目のタイプが、人・動物等の物理的な移動である。Gries のいう「高速移動義」を含んだ、いわゆる実際の具体的な移動であり、物体がある場所から別の場所へと実際に移動したことを表す。2つ目のタイプが、道・川・渓谷などの地形等の仮想移動である。Gries のいう「仮想移動義」と重なり合う部分も多い。仮想移動義の中に川の流れを含むかどうかで議論が分かれるが、本研究では、川の流れを表す用例も仮想移動として分類する。3つ目のタイプがその他で、抽象的な移動を表す用例がここに含まれる。このタイプは非常に雑多な用例が集まったタイプである。

3. 調査結果

本研究は、COCA (*The Corpus of Contemporary American English*)、BNC (*The British National Corpus*)、CAN (*The Corpus of Canadian English*) の3つのコーパスを利用した。場所句倒置構文の用例を得るために、*runs the, runs a, runs an, runs _mc, runs DET, run the, run a, run an, run _mc, run DET, ran the, ran a, ran an, ran _mc, ran DET* の15の検索式を使用した。この検索から得られた用例から手作業で場所句倒置構文を抽出した。結果は表1である。COCA では、合計188例が見つかり、21例が人・動物等の具体的な移動、118例が道・川・渓谷等の地形などの仮想移動、49例が

その他となった。つまり、全体の約 63% の用例が仮想移動を *run* が表している。次に、BNC では、合計 62 例が見つかり、1 例が人・動物等の具体的な移動、49 例が道・川・溪谷等の地形などの仮想移動、12 例がその他となった。つまり、全体の約 79% の用例が仮想移動を *run* が表していることになる。最後に、CAN では、合計 24 例が見つかり、1 例が人・動物等の具体的な移動、19 例が道・川・溪谷等の地形などの仮想移動、4 例がその他となった。つまり、全体の約 79% の用例が仮想移動を *run* が表している。このように、動詞 *run* は場所句倒置構文で使用された場合、仮想移動に大きく偏っていることがわかる。言い換えると、*run* の典型例である「高速移動義」は、場所句倒置という構文においては典型例ではない、ということがわかる。これは、構文毎に好まれる動詞の意味があるということを示唆している。

(表 1: 移動のタイプ別の分類)

	COCA	BNC	CAN
人・動物等の具体的な移動	21	1	1
仮想移動	118 (63%)	49 (79%)	19 (79%)
その他 (抽象的な移動等)	49	12	4
合計	188	62	24

4. 考察—おわりに代えて—

本研究の場所句倒置構文に関する調査から、「構文の機能」「使用文脈」「構文・動詞の意味」は相互に影響を与えていることがわかる。

2 節で、新情報を導入する、Ground を提示した上で Figure を提示する、経験・知覚する順番に主観的に描写する等の場所句倒置構文の機能を確認した。このような機能を持った場所句倒置構文は、Chen (2003) 等で、地図、地形などを描写する文脈で用いられることが分かっている。道案内などにおいても、何か知っている、もしくは分かりやすいものを目印に、新たな場所を提示する。そして、地図、地形を描写する文脈では、*run* は「仮想移動義」を表す必要があるため、*run* の意味の中でも仮想移動が選ばれることになる。こう考えると、「構文の機能」「使用文脈」「構文・動詞の意味」には強い結びつきがあることがわかる。

また、新情報の導入等の場所句倒置構文の機能を考えた場合、その主眼は、動詞後続の名詞句を談話の場に入ることだと言える。その機能を果たすためには、Bimer (1995) 等によると、場所句倒置構文で用いられる動詞は、「情報的に軽く」なければならないとされている。仮想移動は単なる存在を表すため、物体の具体的な移動よりは「情報的に軽い」と言える。言い換えると、物体が移動して出現するのではなく、物体の存在を表している仮想移動的な用例の方が、存在文として機能しやすい。ここからも、「構文の機能」「構文・動詞の意味」には強い結びつきがあることがわかる。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 JP23K12203 の助成を受けたものです。

参考文献 Bimer, B. J. (1995) Pragmatic constraints on the verb in English inversion. *Lingua* 97: 233-256. / Bimer, B. and Ward, G. (1998) *Information status and noncanonical word order in English*. Philadelphia: John Benjamins. / Chen, R. (2003) *English inversion: A ground-before-figure construction*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. / Davies, M. (2004) *British National Corpus (from Oxford University Press)*. Available online at <https://www.english-corpora.org/bnc/> / Davies, M. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/> / Davies, M. (2012-) *The Strathy Corpus of Canadian English (from the Strathy Language Unit, Queen's University)*. Available online at <https://www.english-corpora.org/can/> / Dorgeloh, H. (1997) *Inversion in modern English: Form and function*. Amsterdam: John Benjamins. / Drubig, H. B. (1988) On the discourse function of subject inversion. In J. Klegraf and D. Nefls (Eds.), *Essays on the English language and applied linguistics on the occasion of Gerhard Nickel's 60th birthday*, 83-95. Heidelberg: Groos. / Glynn, D. (2014) The many uses of *run*: Corpus methods and socio-cognitive semantics, In D. Glynn and J. A. Robinson (Eds.), *Corpus methods for semantics: Quantitative studies in polysemy and synonymy*, 117-144. Amsterdam: John Benjamins. / Gries, S. T. (2006). Corpus-based methods and cognitive semantics: The many senses of *to run*. In S. T. Gries and A. Stefanowitsch (Eds.), *Corpora in cognitive linguistics corpus-based approaches to syntax and lexis*, 57-99. Mouton de Gruyter. / Prado-Alonso, C. (2008) The iconic function of full inversion in English. In K. Willems and L. De Cuypere (Eds.), *Naturalness and iconicity in language*, 149-166. Amsterdam: John Benjamins. / Webelhuth, G. (2011) Motivating non-canonicity in construction grammar: The case of locative inversion. *Cognitive Linguistics* 22: 81-105.